

日本とインドの連携強化を

ー日本インド・グローバル・パートナーシップ・サミットで考えるー

開倫塾

塾長 林明夫

Q：日本インド・グローバル・パートナーシップ・サミットに参加したそうですね。

A：(林明夫：以下省略)はい。9月5日～7日までの3日間にわたって東京タワーの近くにあるプリンスホテルで開催された、おそらく日本とインドとの会議では最大規模の国際会議に参加しました。インドに強い関心があったので参加したかったことに加え、会議のコーディネーターの一人である日本銀行OBの方からの強い参加要請があったためです。

インドの日本への関心は極めて高く、躍進が続くインドからは御家族の参加も多くてチャーター便2機を用いたとお聞きし、驚きました。

使用言語は英語と日本語で、両言語の同時通訳がありましたが、日本人の参加者の大半は同時通訳のレシーバーを付けていませんでした。日本人の英語での国際会議参加者が急激に増加していることを知りました。

この会議には、自由民主党からは森首相、安倍首相、民主党からは鳩山首相、それに会議の数日前にお辞めになった菅首相と、歴代の内閣総理大臣が列席してスピーチをなさり、日本政府として開催に最も尽力した国際会議の一つであることがよくわかりました。日本とインド両政府が、経済界と10年にわたり連携を図りながら会議の開催に至ったようです。

Q：そのような日本とインドにとり最も重要な会議に参加して、林さんが考えたことは何ですか。

A：会議の1週間後に、東京の経済同友会で10年ぶりにインド委員会が開催され、その第1回会合でアロック・プラサード在日インド大使のお話をうかがい更に確信を深めたのは、日本とインドは経済関係にとどまらず、すべての分野で相互理解と連携を現在の100倍以上強化したほうがよいということです。

インドに行き体調を崩さない日本人は少ないと言われて久しいですが、インドの方も生水を飲み体調を崩す人が多いようです。もし、インドに日本のような上水道と下水道が整備されれば、インド人やインドを訪れる人々の健康問題はかなり改善されると考えられます。インドは、日本の技術的な進出を望んでいます。例えば、人口の半数近くが25歳以下であるインドに今一番必要なのは大学と工業高校、職業訓練学校であり、特に大学は大切で、これから大学を2000つくっても不足するとお聞きしました。インドだけの力では到底このような教育インフラストラクチャー(基盤)の整備はできないので、日本の企業や学校法人は教育分野に積極的に進出して欲しいと、国会議員はじめ多くの方々から言われました。

デリーとムンバイの間を結ぶ高速貨物鉄道計画は日本の協力で本決まりになり、あわせて高速道路、港湾、大規模工業地帯、そして都市づくりの計画も日本の協力で着々と進んでいるようです。中国の沿海部にも似た開発を日本の協力で成し遂げ、インドの経済発展のエンジンにし、最終的にはインドの貧困の撲滅を図ろうというのが、シン首相の国家戦略の一つのようです。

Q：林さんは、インドは日本にとってどのような国とお考えですか。

A：東京裁判におけるパール判事の判決文を読めば誰にでもわかる通り、インドは日本の最大の理解者の一人だと考えます。

3月11日の東日本大震災に際しても、インドはいち早く救援隊を送り込み、毛布や食糧を大量に提供して下さいました。中東から日本に石油を運ぶ際に最も大切なのは、インド洋です。そのインド洋の安全を守ってくれるのがインドであると考えれば、日本人の生活はインドなくしては考えられません。自由主義、民主主義、法の支配という共通の価値観もあるインドは、日本にとって最も大切な国の一つであると考えます。

Q：学習塾・予備校・私立学校の経営者の皆様に、インドとの関係で考えてもらいたいことはありますか。

A：インドの三大成長産業は「低学費私立学校、私設警備員、水ボトル」であると冗談に言われるほど、インドの学費の安い、政府とは何らの繋がりもない低予算の私立学校(Private low-budget schools without any links to the government)の人気は高いようです。この学校は、公的補助ゼロですので、日本の学習塾・予備校にあたるものと思われまます。学校の規模も小さく、1クラス約30人の3つのクラスの教室をもっているところが多く、これらの多くは子どもたちが年末に公立学校で標準試験を受けられるよう政府系学校システムに登録。公立学校が土地の言語で教えるのに反し、多くの低学費私立学校は英語で教えるため英語の学力が高い。ヒンドゥー語も数学も公立学校よりも学力が高いようです。

われわれは、学習塾・予備校に酷似したこのインドの民間教育にも注目して、よりよい関係をつくりあげ、同業者として切磋琢磨すべきと考えます。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、お読みになれば必ずお役に立つ本を一冊御紹介いたします。

アンドレス・オッペンハイマー著「米州救出ーラテンアメリカの危険な衰退と米国の憂鬱ー」時事通信社、2011年7月10日刊です。ラテンアメリカを日本、自分の組織と読み換えれば、現在の危機をどう乗り切ったらよいかわかります。先のインドの「低学費私立学校」の解説は、この本の332ページを参考にさせて頂きました。原著はスペイン語ですが、私はスペイン語は今のところ読めませんので、あまりにもよい本なので、次の英語版も読みました。Andres Oppenheimer「Saving The American」です。グローバル化に立ち向かっていくにはどうしたらよいか、英語の学習がどれだけ大事かがよくわかる著書です。是非御一読を。

ー 2011年9月21日記すー